



御風詩集



本間文庫

文庫 14

D 201



鉄持を以て甲乙の終る暮年なり身より
詩の趣味を有するに何やらわきも著者御風先
生は字田中孝の出身なりぞ新刊銀文の欄に
右五字を著見せし時感るものなりと一語あり
は至哉稱の如く感せしめたり

長春堂主人を以て



御風詩集

相馬御風著

文庫14
D201

つたなきこの一巻を
ロイド博士足下に献す

長詩

目次

足跡	一
鐘の音	三
歌聲	六
車のひびき	一一
翁	一六
鉦の音	一九
雑居	二一
ゆく秋	二六
柿の實	二八
町の角	三二

寒	空	三四
腫	三七
夜	四〇
雲	の	峯
今	見	る	夢
鐵	路	四七
關	路	四九
焚	火	五四
う	る	ほ	ひ
溜	息	六〇
ト	ン	子	ル
夕	六六

夜	六八
朝	七〇
都	に	て
足	音	七四
静	寂	七七
君	と	わ	れ
冬	の	日
命	八三
ま	ぼ	ろ	し
胸	の	奥
ふ	め	ど	も
泣	か	ぬ
今	日	も	さ
め	ぬ	九三

長
詩



短歌	古橋の賦	天上哀歌	露の扉	二つの鐘	花あやめ	吹雪	二人こそ	堂の窓	夢の花

	一三〇	一二二	一一七	一一二	一〇九	一〇四	一〇二	九九	九六

足跡

はるかなる海の果より
初夏の雲こを起れ。

日は正午、磯には二人
旅人は袂わかちぬ。

西東、砂につけ行く
足跡はつゞきて長し。

足跡はながくつゞけど

この二人いつかは遇はむ。

一すぢの砂の足跡

それとてもやがて消ぬべし。

旅人は笠あげもちて

やゝしばしかたみによばふ。

はるかなる海のはてより

初夏の雲こそ起れ。

鐘の音

鐘なりぬ。——ふとこそおもへ、

目路の果、國の境を、

高山のつらなる上に、

となり國信濃の空の、

緑なす色ほの見ゆる、

灰色の雲にみちたる、

幽鬱のわがふるさとを。

鐘の音はきえぬ、いつしか、

わが頬には涙ぞつたふ。

鐘はまた鳴りぬ。——見ゆるは、
ふるさとの高丘の上を、
穂芒に半うもれて、
白き旗、白き提灯、
六つ七つ立てならべつゝ、
おもむろに進みゆくなる。
葬式のながき列。

鐘の音は消えぬ、ふたゝび、
わが頬には涙ぞつたふ。

鐘三たび鳴りぬ。——こはまた、
なつかしき人の面の、
ほのかにも目にこそうかべ。
ありし日の夢見姿や、
眼のうるみ、頬の艶やかさ、
いひ知らぬ妙なる香にぞ、
われ今し酔へるがごとし。

鐘の音はみたび消えけり、
わが頬には涙ぞつたふ。

歌聲

しづかなる師走の一日、
ふる雪も闇にきえゆく、
たそがれにちかき頃なり。
わが家のかどべに立ちて、
めしひたる乞食少女は、
あはれなる歌をうたひぬ。

その歌をわれはききけり、
いく年の重き病に、
今はたゞ衰へはて、

望さへ日々に絶えゆく、
母人のまくらべちかく、
眼にみつる涙おさへて。

その歌を母も聞きけむ、
力なき眼ひらきて、
ほのかにもわれを見ましき。
あはれ、そはかたみの胸に、
うつし世の同じひいきを、
わかちける終なりしか。

五日経て母は逝きけり。

北嵐烈しくどよむ、
ものすごき吹雪の夜なり、
夢ごとち涙にくれて、
通夜の衆の念佛のひまに、
われはかの歌をききけり。

されどそはかすかに遠く、
かの世より通ふがごとく、
ふと浮び、ふと又きえぬ。
うちふるふ手をさしのべて、
われはいま白衣につむ、
母人の胸うかいひぬ。

氷なす冷たき底に、
かすかなる響はありて、
わが指につたはる心地、
わが胸はしびれふるひぬ。
その刹那、ほそく鋭く、
かの歌はまた聞こえけり。

その後を八年ふれども、
いままもなほ夢にうつゝに、
ふとしてはかの歌声の、
うかび来て胸にぞひやく。

あゝ、かくて世を去る日にも、
われはかの歌をきくらむ。

車のひゞき

つめたき地に
音をたてゝ
雨はふる
くらき夜なり
をちかたに
車のひゞき。
車のひゞき
あゝ、かの夜
君ぞ來し

さむき夜なりき
うき別れ
今はいつこに。

ひゞきは消えぬ
おもひでは

あゝ、かの夜

雨に消えゆく

そのひゞき

暗き世界に。

暗き世界に

雨はふる

あゝ、わが胸

かすかにつたふ

ひゞきあり――

涙ぞながる。

いつこより来て

いづこへか

さてはたゞ

車のひゞき

あやしくも

胸にぞひゞく。

つめたき地に
深くはむ
ぬかるみの
わたちの跡か
わが胸に
うれひぞ残る。

わたちの跡に
雨は降る
かなしき音
君をおもへば
わが眼には

涙ぞあふる。

ふと起りては
ふときゆる
雨の夜の
車のひき。
わが戀も
つひにかゝりき。

翁

さびしさのおもひにたへで、
夕ぐれの街をさまよふ。
すれちがふ人は多きも、
なつかしき一人はあらず、
いづれみなおなじ暮色の
うす靄をまとひてありく。

と見る、いま、橋の欄干に、
たゞ一人身をばもたせて、
せわしげにゆきかふ人を、

何となくあざけるごとく、
ぎろゝ眼にむかへ見おくる、
あやしげの翁ぞあなる。

眞黒なる襤褸をまとひ、
鼻高く、口は大きく、
灰色の髪はみだれて、
肩にまで蔽ひかぶさり、
くぼみたる眼の底に、
ものすごき瞳ぞ光る。

心地のみかくは見ゆらむ、

行きかよふ人のすべては、
その前をすぐるとしては、
うなだれてあゆむに似たり。
日はくれぬ、翁は去らず、
月かげになほも佇む。

いつの日か、われはふたゝび、
かゝる人かゝる翁を、
をのゝきておもひ出づらむ、
運命か、はた死の影か、
さてはたゞ心さびしき、
秋の日の幻か、そも。

鉦の音

一人旅さびしきまゝに
道づれとなりし順禮、
その人と道をわかれて
われは今疲れし足を
合歡樹の花煙のごとき
蔭にしぞしばしやすらふ。

やすらへば旅の心は
おのづから胸にあふれて
われしらす涙ぞながる。

白樺の林のかけに
順禮は遠く離りて
鉦の音はかすかにひびく。

鉦の音の消えゆく方に
順禮の旅をおもへば、
わが心遠くに澄みて
さびしさになれたるもの、
おもひこそ切にわき來れ。

雑居

蒼白き
瓦斯の光にてらさるゝ
八百屋の店と
紅ぐろき
カンテラの火にてらさるゝ
魚屋の店と
春の夜を
ゆきかひしげき巷路に
向ひて立てり。
(さまぐの

思懐ける人々は
織るがごとくに往きかひて
これを見、かれをのぞき行く。

こなたには
積みし青菜や葱の根の
露をふくみて
いきくと
野の色見する傍に
並み居る群は
夏蜜柑
こは南國の故郷の

光をゆめむ。

(さまぐ)の
思いだける人々は
織るがごとくに往きかひて
これを見、かれをのぞき行く。

かなたには
いくつか白き腹見せて
ならぶ飛魚
鱧の鱗
隅の暗きにむらがりて
海底ゆめむ
貝の族

赤き鮪の肉の上
及物ぞ光る。

(さまぐの

思いだける人々は

織るがごとくに往きかひて

これを見、かれをのぞき行く。)

瓦斯の火に

八百屋の店は月光の

野の色を見せ

カンテラの

明りは磯にともしたる

松火のごと

はためきて
魚屋の店に夜の海の
さまをぞ見する

(さまぐの

思いだける人々は

織るが如くに往きかひて

これを見、かれをのぞき行く。)

ゆく秋

ゆく秋の朝のしづけさ
夜あらしの惱のはてに
天地はいまやすらげく
息たゆる翁のごとし。

大空は濃青に澄めど
底にみつ光はあらず
遠山にかゝる白雲
行方なきさまにたゞよふ。

黄色なる朝日の光
枯草の上をてらせば
霜の色とけて流れて
かすかなる光にきゆる。

深山鳥黒きが一羽
いづかたの空より來しか
葉なき樹のうれにとまりて
あらたなる行方にまよふ。

柿の實

ながき夜をみじかき夢の
見はてざるおもひをたどり
風さむき軒に出づれば

枯枝の末にあやふく
柿の實は一つのこれり。

柿の實は一つのこれり
さびしさの思ひもなげに
赤らめる色もつやゝか
枯枝の末にあやふく

柿の實は空をぞ仰ぐ。

柿の實は空をぞ仰ぐ
仰ぐ空いま日は昇り
雲の色黄金に映ゆる
枯枝の末にあやふく
柿の實は酔へるがごとし。

柿の實は酔へるがごとし
ふく風もいづことばかり
あたゝかき光をあびて
枯枝の末にあやふく

柿の實はわが世をほこる。

柿の實はわが世をほこる

居る所高きにあれば

人の手もとるによしなし

枯枝の末にあやふく

柿の實はおそれを知らず。

柿の實はおそれを知らず

あなさても敵こそあなれ

をちかたに鳥のさけび。

枯枝の末にあやふく

柿の實はおそれを知りぬ。

柿の實はおそれを知りぬ
今はたゞ死をまつかたち
何事ぞ鳥も來ぬに。

枯枝の末をはなれて
柿の實は地にぞ落ちぬる。

町の角

蒼ざめし人二人
別れたり右左
夕ぐれの町の角。

右なるは程近き
教會の石段を
のぼりつゝかへり見ぬ。

左へと行きし人
その刹那、急ぎ足

縄暖簾つとくゝる。

空くらく風あらく
ちらくくと雪ふりて
日はまたく暮れにけり。

寒 空

わたり鳥一むれすぎて、
灰色の空はまたしも、
憂愁の胸をとざしぬ。――
高臺の夕べはことに、
冬ごもるさびしさおぼゆ。――
千よろづの市の物音は、
冷えまさる大氣にこゝえ、
消えもせず流れもあえず、
いりみだれもつれまじりて、
せまり来る夕べの色に、

とざされて巷をつゝむ。
とざれしどよみの中を、
一脈のうねりを曳きて、
末遠く雲に消えゆく、
鐘の音を聴きつゝ居れば、
わが心遠くにすみて
いつしかに想ひぞ消ゆる。
あゝされど、それも束の間、
黒煙むらがるあたり、
ものすこき汽笛は鳴りて、
静寂はまたもやぶるゝ。
今し、見ゆ、闇のをちこち、

百千なす街のともしび。
そのうちのとある一つに、
われは、ふと、瞳を据えぬ。

瞳

静かなる森の夕ぐれ
ひぐらしの啼く聲きけば
ふるさとの小野の細みち
ありし日の君をぞおもふ。

黄色なる入日の光
うすれゆく野の面ながめて
うるませし君が瞳の
いまもわが胸にぞうつる。

うつろなる胸の奥より
時ありてほのかに光る
あゝ、君が瞳は、げにも
夢空の星にこそあれ。

その瞳いつかは凝りて
あれ果てしわが胸の野に
灰色の靄を吸ひては
眞白なる花と咲くらむ。
静かなる森の夕ぐれ
ひぐらしの啼く聲きけば
ふるさとの小野の夕ぐれ

ありし日の君をぞ思ふ。

夜

烟は立ちぬ、しづかに
夕ぐれの丘の上
森には夜の色の
おもむろにひろごりぬ。

そよふく風もなければ
烟はほそきながらに
かゝやく空の方へと
望の頭もたげぬ。

丘をめぐりて流るゝ
小川には水ぐるま
ものうげの音たてゝ
疲れたる身をなげく。

烟はいよゝのぼりて
束の間のやすけさを
せまり来る闇の前
いとせめてたのしめり。

あゝ、日毎はた夜毎に
同じ世のいとなみ

骨をすり身をけづる
水ぐるま音にぶし。

丘をつゝみぬ夜の色

烟は闇に消え

水車音がすか

今日もかく暮れにけり。

雲の峯

砂ほこり蒸されてあつき

ちまた路をよるぼひながら

仰ぎ見る空のあなたに

雲の峯高くぞ湧ける。

力なき日毎の歩み

疲れたる腫にうつる

雲の峯日毎に變り
さま／＼の形を見する。

くづれてはまたわき上り
湧き出ではやがてくづるゝ
雲の峯汝が行く方に
わが心日毎にみだる。

さはいへど物なき空の
果なきをのぞむにまして
雲の峰汝を見るごとに
わが心せめてはやすし。

今見る夢

所載

今見る夢は、新室の
香の蒸す春の夜の床に
血汐つらなる胸と胸
もゆるおもひに君と見し、
それにはあらで、巷路に
歩みつかれし病人が
ゆきかひしげき塵浴びて
芥流るゝ泥川の
橋の欄にもたれつゝ
束の間を見る白日の夢。

今見る夢は、初夏の
緑葉洩るゝ日をうけて
珠のごとくもかゝやける
うまし泉に口すゝぎ
樂しく覺めしうたゝねの
あこがれの日のそれならで
獄屋の暗へ引かれ行く
車の上の囚人が
看守人の目をぬすみ
束の間を見る白日の夢。

鐵路

むし暑き空はくもりて
地に低くせまれる下に
末遠く青田を割きて
二條の鐵路ぞ走る。

何事か重き悩みに
地はいたく汗ばむけはひ
無限より無限につゞく
鐵路のみ白く光れり

あはれ、この果なき路を
さまぐの人の思を
日に夜にのせ行く汽車の
いつか、はた、歩みをとめむ。

かすかなる囃の聲と
つるはしの響と交り
地に空につたはるごとに
惱ましく鐵路ぞふるふ。

闇路

初冬の黄なる夕日は、
板葺の屋根にうすれて、
田舎町さびれのなかを、
物賣の聲のみ高し。

町はづれ毛皮つるせる
四五軒の革師の前を、
目ふさぎで通りすぐれば、
並木路風ぞはげしき。

灰色の空は重たく、
降り來んは雪か霰か、
とび迷ふ鳥も見えず、
落葉のみ風にふかるゝ。
かゝる時何をか思ひ、
さだめなき路をゆくらむ、
やぶれたる笠かたむけて、
旅僧はかたへよぎりぬ。

その影の町家のかどに、
きゆるまであとを見送り、
さまざまのあはれをよせて、

われはその末をおもひぬ。

一しさり風くるほしく、
ものすごき響の中を、
大粒の霰はふりて、
日はまたく暮れんとすなり。

夢もきえ情もきえて、
今はたいものおそろしく、
急ぎ足われはあゆみぬ、
となり村わが家のかたへ。

村端の橋の上にて、
器量よし端唄上手と、
此ほとり知らぬものなき、
菓子賣の娘にあひぬ。

商賣の戻りなるらむ、
待つ人を夢みてありや、
闇のみち嵐のなかを、
けなげにも勇みてたどる。

家並の角まがるとて、
同じ時同じき方へ、

一筋の闇の路ゆく、
老若の二人をおもひ、
われはふと思ひまどひぬ。

焚火

夜は更けぬ——父はまた
檜の割木をつぎたして
しめやかに語りつゝけぬ。

一坪のひろき爐に

むかふは父とわれとのみ——
をら方に櫛唄きこゆ。

あたらしき勢いきほひに

火はもえあがり煤けたる

鐵瓶てつびんの湯ぞわきかへる。

永ながき世よのたゝかひに
疲つかれ果はてたる父ちちの面おもて
しげくくとわれは見る。

まことかく父ちちと子こと

焚火たきびを中なかに打うちちとけて
かたらふぞ十年とせぶりなる。

燃もゆる火ひにてらされし
顔かほをすこしくうつむけて

父はいま思ひにしづむ。

狭からぬ家のうち
煙はふかくたちこめて
ともしびの光にあらず。

さしむかふ二人をば
影のごとくも曇らせて
煙こそいやたちまよへ。

外面には一しきり
雪をふきまく風の音――

父はまた言葉をつぎぬ。

うるほひ

なべてのものにうるほふ

朝のしめり、

涙ぞ見ゆる、ちさき

花ぐさにも、

日の光かくてさしそひ
ものみなのにちぞみつる。

朝つゆ、これや夢見し

なごりならむ、

夜こそむなしくきゆれ、

のこる涙、

日の光かくてさしそひ
ものみなのにちぞみつる。

今見よ、花なき草の

末にさへも、

一夜の秘密、ゆかしき

かたち見する、

日の光かくてさしそひ
ものみなのにちぞみつる。

溜息

夏の空くもれる下に
北海は鉛のごとし。
死魚のごと浮べる船の
舳先には綱取まるび
舵取は艦にぞねむる。
力なく帆はしなだれて
帆柱に皺みてからむ。

磯の砂光澤なくもゆる
波邊には鳥さへ見えす

引き上げし小舟も濱坂の
網小屋も、はた藁圍も
何事か重き悩みを
溜息に洩らしもえせず
ひたすらに壓ふるごとし。

波際に腐れる藻屑
捨て、ある魚の腸
はた砂に乾したる鰯
いろくの磯の臭は
硫黄焼く煙のごとく
蒸されたる砂の臭と

風なきに重くみなぎる。

たゞ、しばし江豚の群の
死のごとき沈黙の中を
打ち亂し過ぎ行くあれど
ふとまたもやがてはもとの
蒸鬱の様にかへれば
鈍空につゝめる海は
また重き息をぞ凝らす。

トン子ル

君が眼にうつる山河、
わが前にひろがる大野、
ふと消えぬ——汽車は今しも
トン子ルの闇に入りけり。
ものすごき地のどよもしや、
くろがねの軋りの音や、
滅亡の世のいやはてに、
近づける心地のみすれ、
ありとある情は消えて、
戀の旅——楽しき夢も、

今ははたあだなる闇路。
われはたゞ怖れのまゝに、
思はずも手をさしのべて、
闇のうち君をぞさぐる。
君もまた同じ怖れに、
戀をしも忘れてありや、
手は二つかたみによれど
むすぶべき力はあらず、
身はたゞに物なき空の
闇底へ落ちゆくおもひ、
胸の血はまたく氷りぬ。
そもしばし汽笛は鳴りて

人の世に汽車は出でけり。

夕

友よ、いま
しばし戸あけて
夕ぐれの
空をながめよ
薄ぎぬに
つゝめる、ゆかし
頬のごとも雲ぞ匂へる。
友よ、いま
しばしきけかし

戀人の
胸のごとくも
おぼろなる
空の奥より
えし知れざる鳥の音すなり。

夜

わが胸は
深山がくれの
ほの暗き
森の湖
寂しさは
常世にみちて
影うつす花だにあらず。
われを戀ふ
君が思は

幾億里
遠き空より
夜ごとわが
胸にぞうつる
蒼白き星のかゝやき。

朝

君よ、とく
野に出でたまへ
朝の氣は
空にみなぎり
薔薇色の
雲は二人が
見残し、夢をぞるがく。
君よ、とく
野に出でたまへ

牧の子は
笛ふきならし
小草には
露ぞかゞやく
かくのごといざやめざめむ。

都にて

煤煙のむらがるあなた
夕映の雲うつくしく
眞白なる山のつらなり
甲州の空こそ見ゆれ。

人通りしげき巷の
古びたる橋の欄に
疲れたる身をばもたせて
われは今思にしづむ。

濁川ゆきかふ舟の
苦もるゝ夕餉のけむり
幾すじかのぼりて白く
塵空にみだれてきゆる。

馬、車、人はた電車
雑沓の中にさびしく
われはたゞ夕日にはゆる
遠空の光を慕ふ。

足音

辻燈の火もきえし
眞夜中の場末街
地獄へとつゞくらむ
闇のみち、たゞ二人
あし音もたえづくに
新内の老夫婦
寄り添うて歸りゆく。
ひそくと語らふは
若き日のおもひでか

はたや世の憂ごとか
相もだすをりくを
寂莫の怖れにや
かすかなる絃の音に
まぎらすは溜息か。

かぶりたる手拭の
白きのみほの見ゆれ
とざれし闇の底
影のごとゆく二人
影のごとつかまた
世の外に消えん日を

身みに知しりて歩あめりや。
闇やみの中なか見みえわかね
かならずや手てにさげし
徳とく利りだにあるべけむ
ふと絶たえぬ、足あし音ねは
路ろ次じにもや入いりぬらむ
やゝありてがたびしと
戸とをひらく音ねぞする。

静 寂

如き月げつの夜よは静しずなり
工こう場じやうの幾いく本ほんならぶ
煙えん突とつのけむりはやみて
中なか空そらに月つきぞかゝれる。

生せい活かつの疲つかれにねむる
宿しゆく舎しゃにも事ことやあらむと
板いた塀べいをめぐりてあるく
拍ぱく子し木ぎの音ねは冴さえたり。

いづことも知れぬ方より
をりくは絶え入るごとき
うどん屋のよび聲しつゝ
街の夜も更けてゆくらし。

君と我

花野の春をさまよひし時
われ君と共なりき
われは雲雀の歌にあこがれ
君は舞ひよる蝶をめでけり
(思へばあゝその時より)
夕べの磯をさまよひし時
君われと共なりき
君は波べの貝を拾ひ
われは空なる虹に見とれき
(思へばあゝその時より)

秋風さむくふきそめし朝

われ君とわかれにき

われは夢路の果をたづね

君は涙の谷へ去りけり

(思へばあゝその時より)

冬の日

冬枯の木立のかなた

くづれたる祠たづねて

老いぼれし旅乞食の

とぼくとたどりよること

日は今し眠りに入りぬ。

寂寥や、見わたすがきり

ものみなは死せるがごとく

夜の色のつゝむにまかす。

灰色の霧の奥より

皺枯れし牛の啼き聲、

ふと聞こえ、ふとまた絶えて
野はまたく沈黙にかへる。

命

『今日こそは心ゆく
代物をもて来し』と
黄ばみたる澁面の
荒くれ男籠おろし
鳥屋の前につと立ちぬ。
空は黒雲低うたれ
雪はちらく。

笑顔よき若主人
店頭立ち出で、

網張れる籠のうち
顔よせてのぞき見つ
さて心地よく笑ひけり。
風は大路に吹きあれて
人は稀なり。

縁端に腰おろし
ものすごき笑顔して
籠の口ひらきつゝ
手を入れてさぐり見つ
男は何かつぶやきぬ。
籠の中にはク、と鳴く

くるしき命。

『つぶしには惜しけれど
正月のことなれば
さて、かくはもて来し』と
無残にもつかみ出す
軍雞は地に立ち羽ばたきぬ。
鳥は命の瀬戸際に
けゝろとなきぬ。

まぼろし

いかなれば、かのまぼろし、
束の間を無限のあゆみ、—
また、かば消えも去りなむ、
さりとても、かのまぼろし。

おもへば、げにつかの間、
人は生き、人は死にけり、
さなり、げに、まぼろし、
われは戀ひわれはさめけり。

日のもだえ、夜のかなしみ
身に添へる影し見えねど、
世はかくて夢人さそひ、
束の間をさざみ行くらむ。
あゝされどわれは、まぼろし、
あたゝかきながふところに、
とこしへの夢たのしまむ、
束の間の我にかへりて。

① 胸の奥 万葉

わが胸の奥に室あり
空色の帳を垂れて
眞白なる衾の上
やすらげく君ぞ眠れる。

うつし世にわかれし君の
あとを追ひ影をたづねて
あだにのみ泣きしわれこそ
おろかなる昨日なりけれ。

今ぞわれ心みちぬる
今ぞわれ願たりぬる
荒波の胸の海底
眞球なす君はありけり

わが歩む世は冬枯の
限りなき荒野なりとも
わが胸の奥の花園
花のごと君はあるなり。

うつし身のわが世はいかに
戦のはげしきとても

夢路さへみだれすあらば
やすらかにねむりておはせ。

うつし身の戦はてゝ
愛の園かのふるさとへ
御手とりてゆかむそれまで
それまではめざめたまふな。

ふめども泣かぬ

ふめども泣かぬ
小草、汝も、

われとひとしき
愁ありや、

をなじ愁の
われに踏まれ、
枯るゝ汝が世を

ゆるせ、
誰か知らむ、
踏みしわれも、
小草よ、

いつか汝が生の
糧とならむ。

今日もさめぬ

夢の狭霧は

いつか消えて

今日もこの世の

岸にさめぬ。

夜ごとを「愛」の

小舟うけて

「夢」の大海

うたひ出づれ

沖は荒波

天をとざし

行方さだめむ

星も見えず。

君は帆網に

われは舵に

辛きいはぬ

二人なれど

罪か、とさせる

闇はふかく

あぐるともし火

光たちす

舟は落ちゆく

星のごとく

あはれ、いつしか、

もとの岸邊、

母なく友なく

われは此世の

小暗き磯に

今日もさめぬ。

夢の花

夢の園なる夢の花、一夜一夜に、
數ぞませ、うつゝにあらぬ花なれば、
さめての後はたれと見む。

さめてむなしき白日にも、ひとりしづかに、
見とづれば、うつろの闇の底よりぞ、
うかびてひらく夢の花。

ねがふは君が黒髪に、はたや御胸に、
かざしたき、それさへえせぬ香や色や、

つれなしとこそ君は泣け。

そのうつくしき君に説き、そのかぐはしき、
かたるとも、もとより夢の花なれば、
君にむなしきおもひのみ。

あゝ君とわれとこしへに、かたみに戀ふる、
心のみむすぼれぬれど、いかにせむ、
わかれくの夢の園。

その夢の園夢の花、それゆゑのみの、
わがなやみ、それゆゑのみに君も泣け、

あだにのみ咲く夢の花

堂の窓

夜毎御堂の

窓にすがり

惱み重たき

身をぞ嘆く。

内に御經の

聲はきよく

燭は黄金の

御壇てらし

たかき救ひの

光あふる。

たえずもれ來る

香かのけむり

頸うなじめぐりて

闇やみに消きえつ

悶もだゆるわれを

つゝみまけど

身みにはまとへる

鎖くさり重おもく

世よなる一人ひとりの

胸むねとつなぎ

すがる手てさへも

力ちから足たららず

いつか引ひかれて

闇やみに墮おつる。

われはかくして

いつの日ひにか

きよき御み堂だうに

入いらるべしや。

二人こそ

二人こそ

河をへだてゝ

行く水の

きよき流に

影交す

二もと柳

春くれば

かたみの胸の

望みこそ

緑にもゆれ

秋さむき

風にふかれて

散る葉さへ

流の影の

あととめて

行くよ(夢かも)

冬の夜の

白き月かげ

影はあり

なほも抱きて。

吹雪

山の翁は
市に來て
雪ふる朝を
酒買はで
顔うつくしき
舞ひ姫の
人形買ひて
歸りけり。
翁の家は

一里半
人住む村へ
みちもなき
山毛櫨の木しげる
谷かげの
炭焼小屋の
それなりき。
いづこに生れ
いつよりか
其處に住みけん
一人とて

色いろごのみ。

そそのの日ひのの夕ゆふべ
狩かり人ひとは
里さと遠とほからぬ
山やまみちの
吹ふ雪ゆきの中なかに
倒たふれ伏ふす
翁おきなををここそそは
見み出いでたれ。
息いきたえぬれど

知しるものもなき
山やますみの
翁おきなをを人ひとは
あやしみぬ

幾いく月つきぶりに
里さとに出いで
得えたるは日ひ頃ころ
さだまりの
酒さけにはあらで
これこれはまた
翁おきなにも似にぬ

雨りやうの手てに
しかと肌はだえに
押しあてゝ
ぬくむるごとく
人形にんぎやうを
はなさでありし
翁おきなをは。

花あやめ

なよかに咲さきぬ
花はなあやめ
春はるの行方ゆくへも
知らぬげに
みどり葉はもるゝ
うらゝ日ひの
光ひかりうけては
おもはゆげ。

幼おきなき戀こひの

咲^さきしそ^の日^ひの
かよひ路^ぢに

さまに似^にず

うらさびしげや

さこそあれ

色^{いろ}はかはらぬ

こむらさき。

白^{しろ}きは今^{いま}も

くろ髪^{かみ}に

かざ^ゝれし日^ひの

さまながら

わかれし人^{ひと}の

おもかげは

きえてむなしき

花^{はな}のゆめ。

二つの鐘

世の外ならぬ廣き野の、
湖をへだて、西ひがし、
小暗き森につゝまれて、
くづれず朽ちず幾千年、
二つの寺ぞむかひ立つ。

あした緑の靄ゆりて、
夢の底なるみづうみの
水の面すべりてゆるやかに、
東の寺の鐘の音の、

かなしむがごと響く時

西の岸なる尼寺や、

木蔦まとへる古鐘は、

撞かねどそれに共鳴りて、

音は湖の底ふかく、

もつれて消ゆる靄のうち。

夕べ木精をとみなひて、

夜の色せまるみづうみの、

葦間くゞりてたえぐに、

西の寺なる鐘の音の、

うらむがごとく響く時、

東の寺の鐘はまた
をのづとひくき音をたて、
かなしむ音と、うらむ音と、
彩雲うかぶ水の面を、
からみて消ゆる波の底。
東の鐘のひく間を、
西の岸なる丘の上に、
立つは白衣の尼姿、
春は花さく幹により、
夏は露ちる草ふみて、
手にもつ花は白蓮華、
衣にも映ゆる朝のいろ

老いす消えざる頬の艶や、
音にあくがれの幾千朝、
同じ情の姿して。

西の鐘なる夕ぐれを、
東の岸の葦間より、
黒き衣の袖かざし、
沈む日かげを額にさけ、
これも音を戀ふ若やぎの、
若き姿や僧のかげ、
十たび葦萌え葦枯れて、
おなじ思ひの裾をひく、

二十年なほも鐘は鳴り、
湖はたゞよふ音に暮るゝ。

二つの音は連なりて、
一つの湖にきゆれども、
別れて立てり寺と寺、
鐘はとこしへ若き手の、
力にみつる響して。

露の扉

桔梗原月はなけれど、星あかり
琥珀に照りて紫の露ちる野邊を、
銀鈴の音もしどろや、破れ衣は
鼠黒に朽ちし順禮か、今露の門、
くづれたる花の古扉に、曳く足の、
力もなえてたどくとすがりよりたる
影一つ——風にふかれて。

『秋姫の宮居たづねて、
行きわぶるさすらひ人ぞ。
なさけある主もまさむ、

ひと夜だに宿かしませや。』

いとゞしく露はみだれて、花扉ゆる
風もあらきを誰がためにつとめか、梭の、
たえぐや音はかすかに、胸にしむ
唄もしどろに。

『糸はきれよが

命はつきよが

戀のかたみの

あや錦』

戸なる影——あはれや風に倒れよる、

鈴のくるひ音、くるしげの聲はふるへて。

『きよきみちきよきつとめに

なやむ身ぞ、いざ門あけて、

せめてもの心のやすみ

ゆるしませ、みなさけあらば。』

露はうち、風はゆれども、あかじ、なほ、
花の眞闇扉、梭の音、みだれて、たえて、
またつゞく——戀のほそ糸。

『ほそい命を、

神にもかけて、

待つはたれゆる、

死ぬまでも」

戸なる影倒れぬ、今し、露の戸は
くづれぬ、つひに戀の糸とぎれく
の
梭の音やみぬ、たえ入る唄の聲、
くるしき唸き。

『死なば——もろとも

葉すえのつゆの
消えても消えぬ……』

……

夜はあけぬ、露の野原の枯枯梗、

これや命のあはれなる骸二つ、
鈴虫は葉かげの露に、松虫は
花の中にぞ倒れたる、さはいへ、
今は
おなじ日の光あびつゝ。

天上哀歌

いのりのまゝにゆるされて
身はいま高き天の園
聖き精霊の群にあれど
胸の響きはなほやまず
心は地なる君を戀ふ。
ああ君、二人とこしへに
一つなるべき和霊の
わかれて戀ひし昨日ゆる
われのみいかでゆるされて
このまゝ天に足るべしや。

たらへる靈のつぎくに
百合花かをり孔雀舞ふ
『永久の命』の泉べに
手とり環づくりうたへども
われのみ雲の絶間より
『時』の流の末遠く
をぐらき方に君を戀ふ。
身を蔽ふ衣は眞白きも
つゝむにたへぬ胸の火の
もゆる血汐をいかにせむ。

心さびしきをりくを
橄欖しげる森に入り
力なき身を幹によせ
遠く澄みたる瑠璃空を
枝より落つる鳩の羽の
真白きごとめぐり行く
かすけき月の影見ては
地なる葉かげに仰ぎ見て
共に來ぬべきこの國の
榮あこがれし夜をおもふ。

その月いまは幾億里

かたみに交す追懐の
はかな心の道しるべ
いつか一つの歡喜に
かの追懐をうたひつゝ
天使の舞の環に入りて
笑ひ興する日やあらむ。
舞の衣や、花の環や
わが手にありて君を待てど
君はも遠き地のつとめ。

おもふも怖し世の淵の
くらきに墮らん身なりしを

きよき涙のいざなひに
靈はむかしのふるさとの
天戀ひ得たる二人なり、
今、はた、われは召されてぞ
君がいのりとあこがれの
きよき案内の光得ぬ。
さはいへ、さびし花の床
こゝろはたゞに君を戀ふ。
君が心の翼だに
かけりて來なばいかならむ。
虹の階のぞむにも
二人手とりてのぼらむと

人は、からぬ抱擁に
ほゝえみたりしかの日さへ
おもひ出で、は泣く身なり。
天の樂しさ見るにつけ
いつかわれ等の日や來むと
こゝろはいよゝ君を戀ふ。

われ一人かは、いとほしの
妻やあまたの片分の
靈待つ靈かをちこちの
木かげ葉かげに身をひそめ
神に行くべき日を待てり。

まことや天のたのしさも
片身の靈の嘆きのみ――
なべてのものゝつとめ終へ
天地またく合はん時ぞ
たゞに充つべき榮ならむ。

あゝまたすぎぬ誰が靈の
片身か、翅の音たかく
あなたに樂の音は妙に
孔雀の舞や花あそび
新たにされる和靈を
祝ふ祭はにぎはへど

われはなほしも森かげに
ものうき足をほこびつゝ
涙にくもる眼路の果に
夜となりゆく地をのぞみ
ひとりさびしく君を待つかな。

古橋の賦

川霧淡くたちこめて
葦の葉すれの音にさへ
涙催す夕まぐれ
立つは古りにし橋の上
昔語の城守が
年月ながき圍まれに
矢種も糧もつきはてし
たのみすくなの夕ぐれを
城の樓の破壁に

涙抑へて倚りしごと
何かは知らぬ悲愁の
ふかき思を胸にして
われ今立ちぬ橋の上
朽ちし欄に身をよせて。

二

かゝる夕べや詩人は
枯野の末をさまよひて
果つる期しらぬ人の世の
さびしさ深くおぼえては
空のあなたに永しへの
春の光を慕ふらむ。

それにもあらねわれはたゞ
憶ひ出多きこの橋の
明日はも強き人の手に
かけ變へられん果の日の
思を切にわけたさに
すがりぬ、今し、橋頭
朽ちしながらになつかしき
名はきえはてす鏡橋。

三

縁はあやし、いかなれば
互に知らぬ板と板
木と木といくつ黒金の

釘につながれあつまりて
橋てふものとなれりけむ。
初めて踏みし人やたれ
二十年ながき夜と晝と
強く静かに平らかに
汝が世を経し夢の間を
幾千萬の人の子が
幾千萬の姿して
汝を踏みけむ、今さらに
老をも泣かぬ汝こそは
尊き聖の姿かも。

四

黄に紫にくれなるに
折ふしかはる花車
市場へかよふ少女等が
戀知りそめの水鏡
汝は幾たび見たりけむ。
足もなよらの老旅に
宿なく暮るゝ寒空を
汝が上にしてかこちける
巡禮もはたありにしか。
休らひもなき世の様の
涙も笑も渡しては
身じろぎもせず、やすらかに

眠るが如き汝にさへ
「時」の刃はいたりしか。

五

ああこざかしや人の子は
汝に恥づべき様忘れ
明日しも斧の刃をとぎて
橋よ、汝をば打たんとす。
われ今汝が上にして
板目もわかぬ破損見て
渡りし人の千萬が
忙しの様を懐ひては
涙ぞ流る川の面

あゝ川の面、幾たびか
われわづらひの世をぬけて
思ひ果てなき若き身を
橋のかたへにもたせては
熱き涙をそゞぎしか。

六

今、また、橋よ、汝が世の
破壊の前に目を閉ぢて
明日の運命を思ふにも
涙ぞまさる、しばらくを
あゝ、憧憬よかへり来て
若き姿と不壞の世の

美し夢とに耽らせよ。
明日しも釘の繫絶え
千々にくだけむその果に
残るは何の名ぞ夢ぞ、
この一時を外にして
いかなる影の跡を追ひ
此世のかぎりたづぬとも
めぐり逢ふべき汝ならじ。
七
見よ、月出でぬ、日はくれぬ
柳も泣けるすがたして
露ふりかくる橋の上。

あはれ、此橋この柳
 亂る、草と、立つ我と、
 いつかふたゝび同じさま
 同じ自然の配合を
 月は星はも照らすらむ。
 破れてたえず新たなる
 自然の様をのぞみては
 消えにし千世の萬世の
 現象の行方へわれ惑ふ。――
 ああ、此惑ひつきずして
 人とこしへに生くべきか。――
 八

橋よ、汝と別るゝに
 涙はゆるせ、人の子の
 さかしき業も「時」の手も
 はた近づける破滅をも
 怨ます泣かすのを、かぬ
 眠れるごとく汝が上に
 汚すを恥ぢず泣かしめよ。
 この束の間の涙をば
 またいつの世か汝とわかたむ。

短

歌



君が頬の涙ぬぐひし日のおもひせちにおぼゆる初

秋の風

なげうちてをのが眞珠のくだけちる美を追ひつゝ
ぞ人ほろびゆく

いとせめてありし心のせさなさに束の間見たき戀
の春秋

秋はわれ神にかあらむ朝ゆふにひろき天地人に
み得ず

あまのこころ

あゝ又星君が泣くらむ方に落ちぬかゝる刹那よ二人死ぬべき

稲の香に幼な日おもふわが肩ごし一人は知らず朝の富士見る

野に立てばわれにも添ひぬ行く人に消えあやぶみし地のうすき影

この雨よ今宵は北の枯木原霞まじりに御墓うつらむ(母の七回忌に)

母なくて波のひゞきと乳母の唄とわれをそだてし北うみの里

さびしきや千年あなたの人を戀ひ手による君を遠のくおもひ

遠國へわかるゝごときせつなさの涙を日々にわかたまほしき

夜毎わがまぼろしゑがく古壁にこほろぎ來啼く秋は來にけり

From my nurse

濱芝居科白にまじる波の音簾屋根のうへの天の河
かな(越後にて)

朽木舟ひたく音す夜の川たゝすむわれに薄月の
して

箱馬車に二丁おくれて旅替女と古驛を出でぬ小雨
の朝を

さびれ町闇夜はことに木犀の香に胸をどる君とあ
ゆめば

初秋の風ほのじろし千曲川河の岸なるをちこちの
村

据風呂や軒に月さしこほろぎも松虫も来て君にう
たひぬ

秋雨や籠の鈴虫啼かぬ夜を心に冷えをおぼえぬる
かな

高岡は日こそ照りぬれ秋の人いくたり過ぎぬみな
うなだれて

萩のみち坂をくだれば大河の月に千鳥をきく君が

垣どなり一本銀杏黄にちるを同じくあびぬわが家
君が家

君が肩に虫來てなきぬ露のみち二人何をか夢みけ
る間に

秋の丘銀杏の幹に身をよせて日の入る國の野を遠
く見る

あゝさびしこゝもわが世か野はひろし夢みて來し
や秋の夜の丘

行く水の末とほぐし朝の軒信濃の山は初雪のし
て

ゆるしらぬなつかしさゆる人形の二つを買ひぬ秋
の夜の市

手をあてゝ胸のひびきをうかゞふに似たり野中の
石なづるとき

愁人の胸にも似たる灰いろの空のなかばを雁なき
わたる

春の里鐘なるかたへ老若のおごそかに行く霽の朝
かな

幾百の羊のせなをぬらしけり草に花ちる桃の日の
雨

古庭や真白にちりし木蓮の花に音してふる小雨か
な

春の雪二人につゞく足跡の消えぬがほどに暮れに
けるかな

春の磯二人あゆめば夕映えは砂に黄金色の道つく
りけり

草がすみ浅間の裾を汽車にして都へのぼるうき春
のくれ

蜃氣樓競ひ畫くとしてみやこより畫匠つどふ松かげ
の宿

野^のがへりを先^{さき}ゆく尼^{あま}の笈^{おひづる}に知^しらぬ顔^{かほ}して花^{はな}をへて
けり

麓^{ふもと}原^{はら}もやに鐘^{かね}鳴^なる三十^り里^り泣^なきて越^こえけり初^{はつ}旅^{たび}のや
ま

野^ののけむりうごかぬほどをうれしみぬ胸^{むね}しづかな
る夕^{ゆふ}ぐれなれば

薄^{うす}衣^{ぎぬ}をぬぐがやうにも夜^よはあけぬ堤^{つみ}や橋^{はし}や白^{しろ}梅^{うめ}の
里^{さと}

さづかりし秘^ひ曲^{きよく}は人^{ひと}にうばゝれて笛^{ふえ}うらむまで老^を
ひにけるかな

思^{おも}はれてある夜^よか瓶^{かめ}の水^{みづ}仙^{せん}の胸^{むね}たゞならず薰^{かほ}りぬ
るかな

おもかげに別^{わか}れて一^{ひと}夜^よ空^{くう}漠^{ぼく}の野^のゆき山^{やま}ゆき君^{きみ}たづ
ねまし

森^{もり}や丘^{おか}やかへり見^みるだに胸^{むね}ゆらぐ旅^{たび}果^はつる日^ひの春^{はる}
の雨^{あめ}かな

かゝる夜を世にうつくしき罪ゆるに鞭はうけまし
胸まどかなり

ありし日を静かに思ふ身となりてぬるゝにかなし
春の夜の雨

このおもひ濡れてそのまゝ春雨に流さまほしき夜
もありにけり

舟のうへの若きも磯の老幼もあふぎぬ朝の大海の
虹

連翹に雨けぶる日を軒かげに燕むかふる箱うたせ
けり

丁字の香よする涙の頬にゆれぬ夢とすまじきおぼ
る夜の月

花つみて遠き世戀ふるさすらひのわれに親しく啼
く雲雀かな

まゐらする名しらぬ種にくれなるの花さかむ目を
待つとのたまへ

*give me
the word*

追分節に名を得し馬子がとむらひの朝なり寺の木
蓮の花

小松原うすむらさきの霽すいて奈古の海見る山吹
の窓

忘れてもありし日おもふ若草の堤は人とあゆみた
まふな

朝ゆふにむらがりせまるおも影にしひてそむきつ
春幾日經ぬ

今われに丁字くゆりて月けぶるかゝるさまして
胸に入るや

心ありて今日しも夢の通ひ路をとざすに似たり連
翹の雨

別れの日ちかひし歌の春は來ぬ死の賦やよせむ庭
の木蓮

春の海帆なき柱に身をよせてすゝり泣きしぬ親も
たぬ子は

春の月壁に聖母の御像をおぼろにてりぬ夢のたえ
間を

浮寝鳥さまさぬほどに麗人の水かゞみする藤の池
かな

鶯の鳴く音こだます春の谷をぐらき崖やむらさき
の藤

遇はぬ日のさびしさにこそ歌あらめうらみたまふ
な海棠の雨

君とわが知らぬ思ひのむすぼるゝさまして更けぬ
おぼろ夜の月

遠里の墓に埋め來し花の種の芽をふくころか武藏
野の雨

花御堂花の中なる王子なれば乳母はわかき美女ま
ゐらせむ(釋尊降誕會に)

鐘の音や鳥なく聲や馬子唄や小雨のなかの行く春
の村

の 霽あめ 麥むぎ一いち里り菜なの花はなまじり緋ひ桃ももさく君きみへの路みちのむらさき

頂戴ちやうたい

去さりがたな胸むねの泉いづみに一ひとひらの花はなのごとくもたゞよ
へる君きみ

頂戴ちやうたい

ことさらにわかれく月のみち花園はなひとつめぐ
りて遇あひぬ

の 春はる送おくると二人ふたりのぼりぬ月つきあびて白しろき花はなさく城しろあとの
山やま

悲かなしみて見る日は白しろし春はるの海うみ白しろきながらにたそが
れにけり

糸いとざくら雨あめにぬれてはおん墓はかを撫なづるけしきの目め
にうかぶ朝あさ

春はるなれやかなしき戀こひのかよひ路ぢに小草こくさやしなふ夜よ
の小雨こさめかな

行く春はるの歌うたは御み寺でらの夕ゆふぐれの戸とによりてこそ誦よす
べかりけれ

行く春や罪なきわれの罪ながらくるしかりけり一人しあれば

春の夜をあるひは君がおもひでの一つなるべき窓にる倚りぬ

春の雨君とあゆみしその日さへさびしかりける我なるものを

木蓮の花落つるたびわが胸に響おぼえて見てある夕べ

今さらにわかれてのちの戀しさをよろこぶまでにおとろへけりな

若葉かげわかれし人のおも影の身にそふ朝や白藤の花

みどり野や靄をすかしてあけぼのゝ雲のぞむごと夢とほざかる

夢さめぬ岸は若葉はみづうみはうす紫の靄するなかに

若やかに今日もめざめぬ春ゆくと物おもはしき千人が中に

初夏の若葉のかほり胸にしむ鳥なく森に死なむとおもふ

美しく死ぬ日のおもひ今こゝに胸にみつなり初夏の雨

うなづきてかたらふごとし朝ゆふを一つ小瓶の水に咲く花

梅雨晴や白帆すゞしき朝風ぎに佐渡山うけて海かゝやくも

悲しみの眼はうるほへど夏雲のおごそかなるをたふふる目かな

すだれ越しまるねながらに漁火をかぞへつくして人のこひしき

夏の日のかうたしきよ向日葵の黄金垣せる君が家かな

高たかてる日ひ眞ま夏なつの國くにはおごそかに王わう城じやうなせる雲くもの峯みね
かな

山やま國くにの初はつ秋あき寒さむや乗のり合あひの人ひとむつまじき渡わたし舟ふねか
な

遠とほ蛙かはづ枕まくらに聽きかむ幾いく宵よひの君きみがなみだをなほたのむな
り

御風詩集畢



明治四十一年五月二十八日印刷
明治四十一年六月一日發行

(定價參拾五錢)

著作者	相馬御風
發行者	中根駒十郎
印刷者	山田英二

東京市麹町區土手三番町二十七番地
東京市麹町區土手三番町二十七番地
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所
新 潮 社

所 刷 印 館 文 博

◎ 二 十 八 人 集

田山花袋編
小栗風葉

最上製美本
定價壹圓參拾錢
小包料拾二錢

三 版

◎ 風 葉 集

小栗風葉著

洋布製美本
定價八拾錢
郵稅金八拾錢

新 刊

◎ 奔

流

眞山青果著

洋布製美本
定價拾錢
郵稅金拾錢

近 刊

◎ 青

果

集

眞山青果著

洋布製美本
定價七拾錢
郵稅金八拾錢

再 版

◎ 戀

さ

め

小栗風葉著

(發賣禁止)

二 十 八 人 集

西園寺公望侯題辭 田山花袋氏編 滿谷國四郎畫
德富蘇峰氏序文 小栗風葉氏編 小杉未醒畫

總洋布最上製
定價壹圓參拾錢
小包料金拾貳錢

文壇の名流二十八人の最も自信ある作物を輯めて『二十八人集』成る。報知新聞曰く、新文藝の代表的全集也。早稲田文學曰く、後代に傳へて恥づかしからぬ最善の書也。慶應義塾學報曰く、紀念すべき明治文壇の大著也。讀賣新聞曰く、文壇の傾向を知るに最も便也。中央公論曰く、製本は美麗で實に立派な本である。萬朝報曰く、價至廉也。

初版一週間に再版

出来

麹町區土手
三番町廿七

新潮社出版

◎ゲ エ テ の 詩	◎凌 霄 花	◎小 詩 國	◎歌 集 白 光	◎御 風 詩 集
橋本青雨譯	金子薰園著	金子薰園著	與謝野晶子選 藤島武二畫	相馬御風著
郵定洋 稅價布 金四拾 六拾五 錢錢本	郵定中 稅價村 金參不 四拾折 錢錢畫	郵定洋 稅價裝 金貳拾 四拾五 錢錢本	郵定洋 稅價裝 金參拾 四拾八 錢錢本	郵定洋 稅價裝 金參拾 四拾五 錢錢本
切品		版五	刊新	刊新

◎小 說 作 法	◎新 書 翰 文	◎新 體 詩 入 門	◎和 歌 入 門	◎文 學 入 門
風葉、春葉 秋聲、掬汀 合述	柳川春葉著	有明、泣 山、白、洋 輩序	金子薰園著	生田長江著
郵定洋 稅價裝 金卅全 六五 錢錢冊	郵定紙 稅價數 錢錢頁	郵定紙 稅價數 四三 六拾百 錢錢頁	郵定洋 稅價布 金四拾 四拾美 錢錢本	郵定紙 金價數 稅參三 六拾百 錢錢頁
	刊近		版四	版再

1337

類(書雜)版出社潮新

◎源氏物語梗概

長 連恒著

郵定洋
稅價布
金七製
八拾美
錢五本

版再

◎文章新辭典

日重野
本文文學
章學博
學院士
編題

郵定洋
稅價布
金四製
六拾美
錢五本

版三

◎幻

影

田口掬汀著

郵定紙
稅價數
金四三
六拾百
錢錢頁

版五

◎

作例法

小說辭彙

刊近

